

# データが語る “いま”

本川 裕



第17回

## 若者の キャリア意識変化

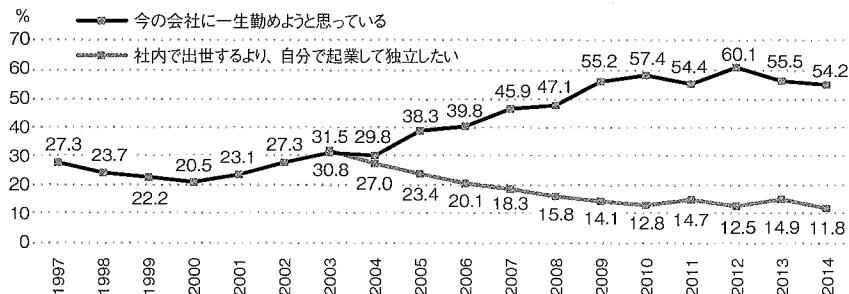
若者の終身雇用志向の復活については、昨年11月号でも示したが、若者のキャリア意識に関する別のデータから同様の意識変化を、再度見ておこう。

日本生産性本部は毎年、新入社員に対するアンケート調査を継続実施している。図は、その中で、新入社員のキャリア意識の変化をとどめたものである。

転職についての調査項目で「今の会社に一生勤めようと思っている」と回答した新入社員は、2000年の20.5%からどんどん増加し2012年には60.1%と、わずか10年の間に3倍となった。他方、「社内で出世するより、自分で起業して独立したい」と答えた者は、2003年の31.5%から2014年の11.8%へと半分以下に大きく減り、過去最低値を更新している。

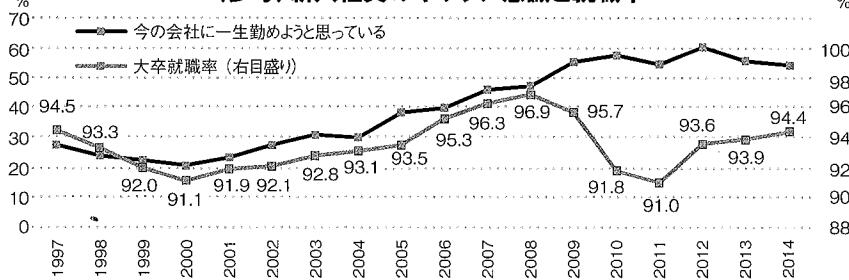
4年前になるが、英エコノミスト誌は「ジャパン・アズ・ナンバー3」という表題で、日本経済が中国経済にGDP規模で追い抜かれる日が来ていることを記事にした。だが、その記事の結論は、海外との競争というより「今日、日本の最大の障害は日本自体だ」というものだった。その記事のなかで、今回取り上げたデータが、日本の若者が覇気を失ってきてている証拠として掲げられていた（ただし2010年度までのデータ）。図に現れている若者のキャリア意識

図 新入社員のキャリア意識（一生社員か独立か）



(注)毎年春に実施している新入社員教育プログラム等に参加した新入社員を対象とするアンケート調査（2014年有効回答数1,761）。「今の会社に一生勤めようと思っている」はその他「きっかけ、チャンスがあれば」「現在、ぜひ転職したい」「いずれでもないわからない」を合わせた4択設問への回答割合、もう1つは「将来への自分のキャリアプランを考える上では、社内で出世するより自分で起業して独立したい」という設問に「そう思う」と答えた割合。

（参考）新入社員のキャリア意識と就職率



(注)就職率は学校側からの調査による就職希望者のうち4月1日に就職できた者の比率であり、就職戦線の状況をあらわしている。

(資料)公益財団法人日本生産性本部「新入社員春の意識調査」  
厚生労働省・文部科学省「大学等卒業予定者の就職内定状況調査」

の変化を、就職戦線の厳しさと関連づけて解釈する見方が、一時期有力だった。参考図には、就職戦線の状況を現す就職率と終身雇用希望率とが、2008年まではパラレルに動いていた状況が示されている。超氷河期といわれた2000年にかけて、志望する会社に入れなかつたことが「この会社で一生働きたい」という意識の低下につながり、また、その後就職状況が改善し志望する会社に入れるようになると「一生働きたい」という意見も増えると考えられたのである。

ところが、リーマンショック後の不況に伴う就職氷河期の再来では、2000年ごろの就職氷河期とは異なり、「一生働きたい」の比率は低下せず、むしろデータは、せっかく入れた会社だか

ら「しがみつく」という意識ではなくかと考えられる動きとなっている。つまり当初は、せっかく希望する会社に入れたから一生勤めるという考え方だったのが、最近は、せっかく入社できたのだから希望する会社でなくとも一生勤めるという考え方へとウエイトの変化が生じているのではないだろうか。そのような考え方の濃淡を伴いながらも、若者の終身雇用志向は確実に復活してきている。そう考えざるを得ないのである。

若者を採用する企業側には、こうした意識変化を受け止める用意はあるだろうか。不本意なまま働き続ける社員にとっては、どんな企業でも「ブラック企業」に見えてしまう可能性が強くなる点に留意する必要があろう。



ほんかわ・ゆたか

東京大学農学部農業経済学科出身。（財）国民経済研究協会常務理事を経て、アルファ社会科学（株）主席研究員。現在、幅広い分野の統計データをグラフ化して公開する「社会実情データ図録」サイトを主宰しながら、地域調査等に従事。著書に『統計データはおもしろい!』(技術評論社)、『統計データが語る 日本人の大きな誤解』(日経プレミアシリーズ)など。